

## 【27】台風前夜

筆者の少年時代（1950年代）という昔のことになりますが、一般的な即時性のある情報というと中波のラジオしか無く、台風シーズンになると、ラジオの伝える気象台発表の台風接近のニュースが殆んど唯一の権威ある行動指針でした。

台風は夜半から翌日にかけて襲来することが多く、子供にとってうれしいことに学校は早引けとなりました。各家庭では停電に備えて懐中電灯やローソクを準備し、寝巻に着替えず着のまままでごろ寝。子供たちの枕元には学用品や教科書をつめたランドセルを並べた。母親は翌日分のゴハンも炊いてニギリメシと簡単なおかずを作り置きしていました。父親は強風でガラス窓が割れないように当て木をしたり、表通りの排水溝の掃除をしたりと忙しそうでした。台風の被害の心配より、一つの目的に向かって一家を挙げて大人から子供まで皆が働くというのが誰にとっても嬉しかったのです。

向田邦子のエッセイに、”台風が来るというと昔はどうしてあんなに張り切ったのだろう”という出だしで、”家を挙げて固っていた。そこがなんだかひどく嬉しかった。父も母も皆、生き生きとしていた。”とあります。

これだけ準備して、運良く台風がそれると、大人たちは良かった、良かったと素直に喜びあい、逆に子供たちは期待外れでガッカリしたものです。

台風一過の青空の下で、八百屋の店先には、強風で落ちたり、傷ついたナスやキュウリが一山いくらの安値で並べられ、貧しい家計の足しになりました。（向田邦子）

現代はというと、TVからインターネットまで便利な画像つきの同時情報がすぐ入手でき、天気予報技術も格段に進歩して不足は無いのですが、行政からの避難指示や勧告が有ったの無いの、救助が遅いのと他人まかせで、自助だの自衛だとスローガンだけはにぎやかです。乏しい情報の下で各人が、誰に云われるでもなく、当然のように精一杯の自助努力をしたあの時代に学ぶべきものがあるように思えます。

（参考）（霊長類と動物図鑑、向田邦子、文春文庫、2014）の中の一節、”傷だらけの茄子”より